日本の戦闘者

荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大卒、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
https://musubinosato.jp/

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷 卓

この数年で国際情勢が劇的に変化し、世界が大きく変わるという話をしてきたが、にもかかわらず、日本と同じように、この歴史的大転換から立ち遅れているように見える大国がある。それがドイツだ。そこで今回は少しドイツの話をしよう。

先ずは、俺の身の上話の中で、平成7年（1995年）から9年の間、ドイツ連邦軍指揮大学（フューリングス・アカデミー）へ留学したときのことをもう少し詳しく話すよ。

戦後のドイツは日本と同じように、米英から歴史の断絶を強要されたために、あれほど強かったドイツ軍やプロイセン軍の精神的継承はなくなってしまった。戦後の日本が、個人の生命以上の価値を失い、世界最強の戦闘者集団としての影も形も失ってしまったように、ドイツ軍も精神面において弱っちいものになってしまった。社会全体の雰囲気が命を捨ててまで国のために戦うことに価値を見出せなくなったわけだ。

とはいっても、日本にもまだ伝統文化を護り、そこに自分の生命以上の価値を見出している戦闘者が生き残っているように、ドイツも完全に死んだわけじゃあない。

戦後、米英は、日本とドイツが二度とアングロサクソンの秩序に対抗できないように厳格なる制度を確立したが、そのやり方はそれぞれ異なるものだった。なぜなら、戦前、日本の周りの諸国家は皆日本と価値観を共有する同盟国で、共に米英と戦ったのだが、ドイツは周りがすべて敵国で対立関係にあったからだ。だから、戦後の英米の対ソ戦略上、日本とドイツを再軍備させるに当たり、ドイツに対しては最初からドイツ軍をNATOに組み入れることにした。これによって、ドイツ政府が単独で自国軍を指揮運用できないようにし、戦勝国がドイツ軍を指揮運用する方式を取った。これに対し、アジアでそれをやろうものなら米軍と豪軍以外は、全て日本とともに大東亜共栄圏を目指した諸国家の軍なので、米国を中心とするハブ方式で国別にコントロールすることにし、日本に対しては憲法9条と日米同盟で自衛隊を管理する仕組みを取った。

念のために言っておくが、大東亜戦争当時の中国では、日本と中国国民党政府（首都南京）は同盟関係にあり対英米戦争を遂行していた。これに対し、米英が支援する毛沢東の中国共産党軍（首都西安）と蒋介石の国民党軍（首都重慶）が中国国内で戦っていた。日中戦争なんて言う造語は戦後出来た言葉で、そんな戦争を日本はしてないよ。また、グリーンベレーとCIAの前身であるOSSが中国で遂行していた非通常作戦は、親日的感情を持っていた多くの中国人に反日感情を植え付けるため、民間人に対するテロや民間人を使ったテロを工作し、「中国人が日本人を殺した」あるいは「日本人が中国人を虐殺した」という状況を作り、あるいはデマを流して、相互の敵対感情を醸成していたんだよ。こうした敵対感情を醸成する謀略活動は英米の得意技だが、今でも、「陸自ヘリが宮古島上空で墜落したのは中国軍がやったのだ」とかいう極めて軍事常識と政治常識から逸脱したバカ話を拡散しているのを見ると、何も変わっていないとつくづく思うよ。

話を元に戻す。1955年ドイツ連邦軍は、NATO内の軍隊として創設された。ドイツ国内では、「デモクラシーの軍隊」として誕生する。日本でも「民主主義の自衛隊」を言われたのと同じで、どちらも言葉とは全く無関係に、同じ時期に英米の対ソ連略上の必要性によって作られた軍隊だ。ドイツ連邦軍が日本の自衛隊と違うのは、徴兵制度下の軍隊であるという点だ。戦後の日本では、「徴兵制度」は議論すらタブー視されているが、これは、徴兵制度は国家の国民に対する軍役の強要であり、本人の意志に反する苦役の強要に当たるため憲法の趣旨から許されないとしているからだ。簡単に言えば、「戦争は悪いこと。軍人は悪い人」と教えてきたと言うことだな。ところが、ドイツでは全く逆で、職業軍人化した軍隊は、ヒトラーのナチスのように「国家の中の国家」すなわち国民の意志とは異なる意思で行動する恐れがあると危惧されたわけだ。そこで、戦後のドイツでは国民（男子）全員が兵役に服することとなった。俺が留学していた頃は、例えば師団約22,000名の兵隊のうち職業軍人は全体の1割にも満たない約2,000名程度、そのうち、全体の60％を占める兵員（日本で言えば士長以下、英語ではプライベート）は全員が徴兵軍人であった。さらには、師団の広報部には、民間の記事作成・編集の専門員が2名配職されており、軍に関する情報は基本的にすべて市民に公開するのが一般化している。

このような徴兵制度の下の「デモクラシーの軍隊」は「制服を着た市民」とも呼ばれ、まさに国民皆兵であるのだから軍服を着て街を歩くのは当たり前で、軍服を着ていると何所でも敬意を持って迎えられる。日本では、日教組の先生から「自衛官の子供は教室から出ていけ」と言われて机を廊下に出されたようなこともあったが、今でも東京勤務の自衛官が制服通勤できないのとは大きな違いである。

ただし、「デモクラシーの軍隊」の面倒なところは、「個人の自由と権利の尊重」と「任務遂行に対する責任と義務」のバランスを如何に適切にするかということだ。事実、命令指示に対する「苦情」と「不服」は、師団司令部だけでも年間100件を必ず超えるとのことだった。特に、俺が留学していた時は、それまでのNATO軍の中だけで軍事作戦をするという戦後軍事体制を見直し、ドイツ軍単独の作戦やNATO域外の軍事作戦も遂行できるよう防衛構想の大きな転換を図っていたため、実任務行動に対する不服申し立ての書類が各部隊において山のように積まれていたよ。

いずれにしても、俺がドイツに留学していた頃の冷戦終結後の新世界秩序への移行期はとても重要な時期で、急速なソ連経済圏の崩壊と西側諸国家の対米自立への挑戦が活発な時期だった。エリツィン大統領の市場開放政策によりロシアの国家資源は西側の資本に食い散らかされ始め、カーター大統領の補佐官ブレジンスキーの戦略である『NATOは東方に拡大する必要がある。ポーランドからウクライナまで、そしてすでにかなり後退したロシアの国境線まで拡大するべきである』との考え通り、米ソの約束を破棄しNATO東方拡大が当然のように話題にされていた。ドイツが受け入れる外国人留学生（少佐以上）も、ロシア・東ヨーロッパ諸国枠が拡大され.俺の同期海外留学生63名中31名がロシア・東ヨーロッパ諸国の軍人だった。ロシアからは陸海軍とも大佐が来ていた。同期のロシア陸軍の大佐はスペツナズの指揮官だった。

この間、俺は、第10戦車師団に1ヵ月弱の隊付き研修をし、当時最新式の主力戦車レオパルト2や空中機動が可能なウィーゼル空挺戦闘車などに搭乗して、不整地を時速80km/hで走行・射撃したり、そこから急ブレーキでスピン停止、森林の中の高速走行、スペックぎりぎりの超壕・超提走行等を体験して、ヘルメットがボコボコになり首がひん曲がりそうになった。それ程優れた装甲機動力が売り物のドイツ軍だったが、新世界秩序の世界では戦車のような戦力は無用として軽歩兵や特殊部隊の強化に切り替えた。最近ウクライナに送られている戦車は、今や戦場において役に立たなくなった遺物だよ。

ドイツは、NATOの変革において、ドイツ独自でドイツ軍を指揮運用できるような枠組みをつくり、国際政治において軍事的手段が使えるようになった。政治経済では、EUのリーダー的地位まで国力を向上し、政治的にじわじわ力をつけてきたドイツだったが、米英の影響力を排除したWEU（西欧同盟）の中の軍事的リーダーのポジションも取ろうとしたのだが、これは米英に潰された。

このように、冷戦終了直後は対米自立志向のドイツだったが、今回のウクライナ問題では米国から潰されそうになっている。米国のウクライナ問題での戦略目標には「ロシアの弱体化」だけではなく「西側同盟の連携強化」というのがある。これは、近年、米国の影響力を排除しロシアとの協調を図るドイツ・フランスに対する離反阻止が含まれていることは自明だよ。

日本と同じように、米国にロシアからのエネルギー供給断絶を迫られ、更にはノルドストリームまで破壊されてエネルギー不足に追い込まれているドイツだが、これから米国との関係をどう決断するかで、今後のドイツの運命が決まって来るよ。

そんなドイツ留学間に、俺にとって最も心に残ったことは、テレビで放映されていた「神風特攻隊の映像」と「欧米以外の留学同期生たちからの日本の戦闘者に対する畏怖」の言葉だった。ドイツのテレビでは頻繁に「神風特攻隊の映像」が放映されていた。ニコニコ笑って敬礼し出撃する当時の日本の戦闘者たちの映像だ。そこで、ドイツ人に「なぜ、神風の映像がよく放映されるのか」と聞くと、「死地に趣く青年たちが、恐怖心も興奮も見せず、笑って飛んでゆくその姿に心からの敬意を覚えるからだ」という。また、海外の留学生たちは口をそろえて「今、日本は米国の下で沈黙しているが、いざとなったらもう一度戦うんだろ。死を恐れないかつての日本の戦闘者のように」と俺に言った。

俺ら日本人は、今でも大東亜戦争まで継承されてきた日本の戦闘者たちの偉業によって守られている。世界には、日本の戦闘者に心から敬意を表し期待している人たちがいる。これが俺にとって、最も心に残ることだったよ。

レオパルト2A4戦車と。ドイツ第3世代主力戦車で、日本でいうと90式戦車に近い。

ウィーゼル1空挺戦闘車と。現在も使用している空挺部隊向けの小型装軌車輌だ。

NATOのE-3 AWACS早期警戒管制機で各国隊員と。

これもドイツで生まれたBo 105P/PAH-1対戦車攻撃ヘリコプターと。左右に6基のHOT対戦車ミサイルを装備した。2001年生産終了。

38-39.indd 38-39 2023/04/28 14:57